

マウス改造講座に参加して
ユニバーサルデザインにつながるマウス改造

長澤 靖浩
(枚方市立桜丘中学校)

はじめはどうなることかと思ったけど、援助スタッフがなくて手をあげると机まで来て目の前で説明してくれたので、なんとか完成することができました。横腹にジャックをつけることで、普通のマウスとしての使用にもぜんぜん支障のない、スマートなものに仕上がったと思います。



講師の先生の話の中身としては、マウスの構造の話は僕には難しすぎましたが、いろいろなスイッチの紹介がおもしろかったです。マウスにジャックをつけることは、純粹に「技術」的な問題ですが、スイッチ部分に関するいろいろな工夫こそ、個に応じた「教育」の問題だと感じました。



どんな器具でもいえることですが、子どもの訓練によって使いこなせるようになるという側面と器具の使い勝手のほうを子どもに合わせていくことで使いこなせるようになるという側面がありますよね。その後者の側面を追求して、いろいろなスイッチを工夫開発してこられた講師の先生やその周辺の方々の情熱に感銘を受けました。

車椅子の肘掛の部分に取りつけて、(手の)可動域のとても狭い子でも使えるようにするもの。足ふみ用の頑丈なバネのスイッチを使ってバンバン激しく叩く子の使用に耐えるようにするもの。

必要は発明の母と言いますが、「障害」も発明の母だなと思います。

そこに使い勝手の悪さがあるから使い勝手をよくしようとする。

あたりまえの行為のようではありますが、それをどこまでも追求していくことは、創造的な楽しさにつながっていくのですね。

また子どもの実態に合わせて器具を工夫することは別に訓練の否定なのではなく、マウスの場合はコミュニケーションツールだから、その目的に沿って使い勝手をよくしようとしているわけなのだとよくわかりました。つまり、いつも目的に応じて器具を工夫すればいいのであって、たとえば訓練器具の場合も、もっとも使い勝手のよい(その子の訓練という目的に適応した)ものを工夫すればいいのですね。

つまり、いつでも創造的工夫は奨励されるべきことだと思いました。

それは実はいわゆる「障害」のあるなしに関わらないことでもありますよね。誰でもにとって使い勝手がいい製品を追求するユニバーサルデザインの理念にも繋がっているように思います。別スイッチ取り付けジャックが横腹についたマウスというのも、ひとつのユニバーサルデザインの実現かもしれません。基体部分（マウス）をユニバーサルデザインにして、取り付け部分（スイッチ）でさらに個に合わせて創造的に工夫するという二重構造も、いろいろと応用のきく考え方のように思いました。

